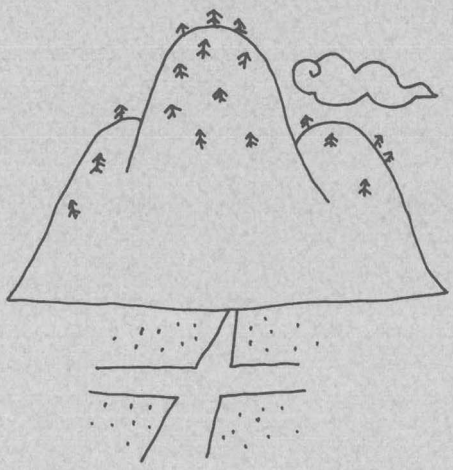
どんぐり民話館

星新一

どんぐり民話館

星新一



新潮社

どんぐり民話館

印刷　1983年10月15日
発行　1983年10月20日
著　者　星　新一
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
〒162　東京都新宿区矢来町71
振　替　東京4－808
電　話　業務部 (03)266-5111
編集部 (03)266-5411
印刷所　株式会社　光　邦
製本所　加藤製本株式会社
定価　850円
© Shin'ichi Hoshi, 1983 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，小社通信係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-319421-9 C0093

目

次

親　切……7
お寺の伝説……13
王　さ　ま……20
事件の発生……25
こころよい人生……33
小さなお堂……43
酒の上の会話……47
秘　密……51
なにか異様な……56
ふしぎな犬……65
出　現……70
双　眼　鏡……81
音　色……86
永遠の青春……96
影　絵……98
さもないと……109

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

指紋の方程式……114
来訪者たち……123
ある人生……132
領主の館……137
花……147
征服の方法……151
旅の人……158
手段……165
青年とお城……169
ケヤキの木……179
神殿……184
行事……192
つきあい……196
応対……200
どんぐり民話館……206

装幀・カット　和田　誠

どんぐり民話館

親　切

その男はひとつの列のなかにまざって立っていた。なかなか前へ進めない。とてつもなく長い列で、自分より前にどれだけの人数がいるのか、見当もつかない。男は前の人の肩に手をおいて聞いてみた。

「もしもし、これはなんの列なのでしょう」

しかし、なんの反応もなかった。ふりむいても答えてもくれなかった。しかたなく、男はうしろをむいた。そこには女の人がいた。話しかけてみる。

「あなたは、どこからおいでですか」

同様に、反応はなかった。こっちの声が伝わらないらしい。目の焦点もさだまらない。そのくせ、列が少し進むと、女はゆっくりと足を動かして歩くのだ。

「なんということだ」

男は立ったまま腕組みをし、天をあおいだ。うす曇りの空で、まるで面白さがなかった。鳥

もチョウも飛んでいない。その時、そばへすり寄ってきて、声をかけてきたのがいた。
「感想をつぶやかれましたな」
背の低い、ふとりぎみの男性で、あいそのいい笑い顔をしていた。男はうなずく。
「ああ、こんな調子じゃあ、退屈でがまんできないものね」
「どうです、この列の、うんと前の方へご案内いたしましょうか」
「ありがたいね。いい話だ。しかし、列を飛び越えるのは、アンフェアじゃないかな」
「あなたひとりぐらいなら、どうってことはありませんよ。それに、ほかの人は感情を失っている。あなたの存在にすら気がつかないし、わたしも目に入らない。文句など言われたりはしませんよ」
「なぜ、そう親切なんです」
「気が合うんでしょうね。あなたは、わたしのことをみとめて下さった。お力になろうという気にもなりますよ」
「じゃあ、たのむか」
「ついていらっしゃい」
男はそいつにうながされて列をはなれ、案内されるまま、前へと急いだ。かなりの距離を歩いた。やがて、そいつは言った。
「そこ、そこ。そのへんに割り込んで下さい。わたしがうまくやってあげます。ここまでくれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ば、もうすぐですよ。では」

そいつはどこかへ行ってしまった。男がそこから二十歩ほど進むと、門があった。それが天国への門であることは、直観的にわかった。おかげで、早くたどりつけた。

とがめられることなく、なかへ入れた。

「なるほど、ここが天国か」

まちがいはなかった。平穏、静かさ、やすらぎがただよっていて、苦痛めいたものはなにもない。人びとは楽な姿勢でじっとしていた。話しかけようとしたが、話題になりそうなものはなにもない。

ほとんど変化がない。ただ、ごくたまにどこからか名を呼ぶ声がし、その人はどこかへ行く。どこへ行くのかは知らないが、変化を体験できるらしい点はうらやましかった。やがては自分の呼ばれる時がくるのだろうが、それにはどれくらいの時間を待たなくてはいけないのか、予測もつかない。いやというほどかかりそうだ。こんなことなら、なにも急いで来ることもなかった。

「なんということだ」

男がつぶやくと、背の低い、ふとった男性が笑い顔で近づいてきた。

「そうお感じでしょうな」

「どこかで会ったことがあるようだが、思い出せない。すまんな。しかし、ここで話しかけて

くれる人がいるとは」
「気が合ったんでしょうね。かなり退屈なさっておいでのようですね」
「もちろんさ。当分は名前を呼ばれそうにないし、もう、あきあきだ」
「呼ばれることのお手伝いはできませんが、出口ならご案内しますよ」
「えっ、出口があったのか。たのむ、なんとかしてくれ。それにしても、親切だね」
「喜んでいただくのは、うれしいことですよ。さあ、どうぞ。こっちです」
草むらのなかへ行く。そいつは、ちょっと見ただけではわからない、なにかをずらせた。それは穴のふただった。
「ここが出口か。いろいろと、ありがとう。とにかく変化は起りそうだ」
男はそこに入る。暗かったが、なめらかで、すべり台に乗ったような気分だった。しばらくして、平地にほうり出された。ふりかえってみたが、穴の出口はどこにもなかった。
「地獄に送り込まれたらしいな」
それは直観でわかった。なにしろ、むし暑い。いやなにおいがし、いやな音が絶えることなく、なにも食べないのにいやな味がしていた。それらの感覚はつねに変化し、なれるということがなかった。人影は目に入るが、だれも自分のことにせい一杯で、話し相手になるどころではない。
ごくたまに名を呼ばれ、うれしそうな表情になって消える人があるが、その番がいつ回って

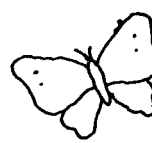
くるかは見当もつかない。
「なんということだ」
男がつぶやくと、小さなふとったやつが出現し、話しかけてきた。その時だけ、いやな音は弱まった。そいつは言う。
「そうお感じでしょうな」
「ああ、当然だろう。あなたとは前に会っているような気がするが、思い出せない。とにかく、話すことができて、うれしいよ」
「気が合うんでしょうね。なんでしたら、ここから出してあげましょうか」
「そ、そんな方法があるとは、知らなかったよ。たのむ。しかし、親切なんだね」
「同情すると、なにかしてあげたくなるのでね。世話好きなんでしょうね。もっとも、だれに対してもではありませんが。さあ、こっちです」

男はいま、現世で働いている。働きざかりだ。むやみと忙しい。ごくたまに、少しだけひまが出来る。少年のある日のことを思い出しかける。いくつの時だったかな。これからどれくらい勉強しないと、社会へ出られないのか。それを考え、ついつぶやいたものだ。
「なんということだ」
あの時、だれかがはげましてくれたな。その気持ち、わかります、わたしがついていますよ、

とか。ふとった人のようだったが、よく思い出せない。あれは夢だったのかな。

しかし、そんなことは、すぐに中断させられる。なんだかんだと仕事が押し寄せ、毎日が矢のように過ぎてゆくのだ。

お寺の伝説



むかし、貧しい村があった。

その村でも、とくに貧しい農民の一家があった。夫婦と、男の子と女の子がひとりずつ。朝から晩まで働きづめ。食うのがやっとだった。しかし、だれも深く仏さまを信じていた。

ある夏の日、畑で妻が言った。

「きょうのように暑い日もあるし、冬はしびれるほど寒い。だけど、子供にも恵まれ、まあ、なんとか生きている。金があって病気なんてのより、ずっといいわけでしょうね。これも、仏さまのおかげね」

男はうなずいて言った。

「そうだ。ただ残念なのは、この村にお寺がないことだ。ここの者、死んだら土に埋められ、墓石が置かれるが、成仏しているのかどうかわからん。いつも思うのだが、小さくてもいいから、お寺があればなあ」

その時、どこからともなく、白いチョウが飛んできた。三匹が列をなして、ゆっくりと飛ぶ。男はそれになにかを感じて、あとを追った。森を抜けたところの、急斜面のがけの途中あたりで、チョウたちはつぎつぎと消えた。

「どういうことだ」

よじのぼって、そのあたりを注意して調べると、小さなほら穴があった。のぞき込むと、布の袋があった。あけてみると、小判がつまっている。男はそれを持ち帰った。

「チョウに導かれて、こういうものを手にいれた。なにに使うべきか、わかっているだろうな」

妻が答えた。

「もちろんですわ。仏さまのみ心のあらわれです。そっくり、お寺を建てるのに使いましょう」

子供たちも、文句は言わなかった。当時は、親にあれこれ口をはさむ風習はなかったのだ。

そのころ、各地を荒し回っていた山賊があった。いかなる事情で成立したのかはさだかではないが、若いが腕の立つ青年が、五人の子分を従え、金を奪うのだった。

そして、ある夜、庄屋の土蔵を襲った。金があるらしいと目をつけてだ。それは事実だったが、誤算があった。用心棒が二人、やとわれていた。プロだけあって、強いのなんの。子分の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook